

『みんなの笑顔のために』

防災について考える

12月12日（月）に、和水町PTA連合会研修会が和水町中央公民館で開催されました。研修の内容は「防災」です。和水町在住の防災士 柳原志保さんを講師にお迎えし、研修を行いました。研修の中で、防災シュミレーションゲーム「クロスロード」を実施しました。今回も取り組んだその問題のひとつを紹介します。みなさんはどう考えますか。



問題：あなたは食糧担当の職員です。

被災から数時間。避難所には 3000 人が避難しているとの確かな情報が得られた。現時点で確保できた食糧は 2000 食。以降の見通しは、今のところなし。まず 2000 食を配る？

YES 配る

or

NO

配らない

(どちらかのカードを選択し、その理由を発表します。)

YES の意見

- ・ お年寄りや病気の方、子どもに先に配り、体力のある人は我慢すればよい。
- ・ 畑などがあるなら、そこから食糧を借りてきて、3000 人分に増やしてから配る。
- ・ 先着順で食糧を配布し、配れなかった人には、「次回の食糧配布優先カード」を配る。

NO の意見

- ・ 行政には常に公平性が求められるので、全員分揃うまでは配ることができない。
- ・ この段階で食糧を配布するためには優先順位を決めなければならない。その基準をどこに置くかが難しい。
- ・ 誰かに先に配ると、どんな理由があっても必ず文句がでる。
- ・ 食糧が次回、何時に届くか分からない状態で、特定の人にだけ配ることはできない。

このゲームを通して、様々な意見や価値観を共有したうえで決定することが大切であると感じました。この「クロスロード」は、実際に阪神・淡路大震災であった事実をゲームに応用したものです。行政の中には、「公平性」の面から「1人に1個、配れる数を確保するまで配布しない」と決めた結果、食糧を腐らせたところもあったそうです。老人と子どもにのみ先に配るという決断をした自治体もありました。

昨日の研修では、「避難所はホテルではない。自分の食料は、自分で避難所に持ち込むことも大切」との話がありました。日頃からの備えが必要であることを改めて考えさせられました。

[illegible]

東日本大震災

今から１１年前の東日本大震災で起こった東京電力福島第１原発事故のために、福島県から横浜市に自主避難した児童が、転入先の市立小学校でいじめを受けて不登校になった問題が報道されたことがありました。そのとき、以前勤めていた学校で、担任をしていた学級の生徒に、裏面の『ベトナム中を涙させた少年の話』を紹介しました。

「こんなに人間らしくけなげに生きている少年が、差別されるようなことは絶対に許してはいけない。そんな思いを劇を通してみんなに伝えて欲しい。」と文化祭の劇に取り組んだことがあります。是非、読んでみてください。

ベトナム中を涙させた少年の話

東日本大震災直後、福島県に派遣された一人の警察官がいた。彼は在日ベトナム人の両親を持ち、日本に生まれ、人のために働きたいと帰化して警察官になった。

その彼が派遣された場所は、福島第一原発から 25km 離れたある被災地。震災と原発事故の最も過酷な状況の中で治安確保のための派遣だった。しかし、治安は安定しており、住民の見回りも機能し、彼は被害者の埋葬と食料分配の手伝いを多忙な職員に代わって行っていた。被害者と向き合った初日こそ涙を流したものの、余りに酷い惨状に泣くことさえ忘れ、ただ呆然と仕事をこなす毎日となった。

忘れもしない 3 月 16 日の夜。被災者に食料を配る手伝いのため向かった学校で彼は 9 歳だという男の子と出会った。寒い夜だった。なのに男の子は短パンに T シャツ姿のままで、食料分配の列の一番最後に並んでいた。気になった彼が話しかけた。長い列の一番最後にいた少年に夕食が渡るのか心配になったからだ。少年は警察官の彼にポツリポツリ話を始めた。少年は体育の時間に地震と津波にあう。近くで仕事をしていた父が学校に駆けつけようとしてくれた。しかし、少年の口からは想像を絶する悲しい出来事が語られた。「父が車ごと津波にのまれるのを学校の窓から見た。海岸に近い自宅にいた母や妹、弟も助かっていないと思う」と話したのだ。家族の話をする少年は、不安を振り払うかのように顔を振り、にじむ涙を拭いながら声を震わせた。悔しさや心細さや寒さで・・・

彼は自分の着ていた警察コートを脱いで少年の体にそっと掛けた。そして持ってきていた食料パックを男の子に手渡した。遠慮なく食べてくれるだろうと思っていた彼が目にしたものは、受け取った食料パックを配給用の箱に置きに行った少年の姿だった。

啞然とした彼の眼差しを見つめ返して少年はこう言った。

「ほかの多くの人が僕よりもっとおなかがすいているだろうから・・・」

警察官の彼は少年から顔をそらした。忘れかけていた熱いものがふと湧き上がってきたからだ。少年に涙を見られないように。それにしても… まがりなりにも大学卒で博士号をもち、髪にも白いものが目立つほどに人生を歩んできた自分が恥ずかしくなるような、人としての道を小さな男の子に教えられるとは。

9 歳の男の子、しかも両親をはじめ家族が行方不明で心細いだろう一人の少年が、困難に耐え他人のために想いやれる。少年の時から他人のために自分が犠牲になることができる日本人は偉大な民族であり、必ずや強く再生するに違いない。

自分の胸の中だけにしまっておくにはあまりにももったいない話だった。いや、誰かと自分の感動を分かち合いたかった。彼はベトナムの友人に自分の体験した話を打ち明けた。ベトナムの友人も感動して祖国の新聞記者に伝えたのだろう。Vietbao 紙の記者は次のような記事をのせて、少年と日本を称賛した。

「彼がベトナムの友人に伝えた日本人の人情と強固な意志を象徴する小さな男の子の話に、我々ベトナム人は涙を流さずにはいられなかった。」「我が国にはこんな子がいるだろうか」と…

この記事が大変な反響を呼ぶ。決して裕福とはいえないが、ベトナム国民からの義援金が殺到したという。

